

富山県氷見市のボカスギ林業景観の文化的価値

Cultural Values of the Bokasugi Forestry Landscape in Himi City, Toyama Prefecture

人文科学系／景観研究／論文

芸術文化学研究所

池田 俊寛

Toshihiro Ikeda

◎研究目的と方法

富山県氷見市の丘陵地にはボカスギ林業景観が広がる。このボカスギ林業景観は19世紀後半からの電信電気産業の発展に伴う電柱材需要へ対応するため、成長の早いボカスギを植林した歴史的背景を有する。さらに時代を遡ると、古くから氷見市の丘陵地ではノウ(焼畑を伴う山地での移動耕作)が慣行された。近代以降このノウにボカスギ林業が組み合わさり、スギの植栽初期に株間で農作物を育てる間作を行うことで、耕作地の限られる山村での食料生産と電柱材生産の複合的な生業が行われてきた。

しかしすでに間作の慣行は失われた中で、ボカスギ林業景観の文化的価値はこれまで十分に議論されてこなかった。本研究では①ボカスギ林業の展開過程、②ボカスギ林業地における焼畑や間作との関係、③ボカスギ林業景観の特徴、④間作地での社会的関係、について文献調査と氷見市全域にわたるヒアリング調査を行い、それらの情報を地理情報システムなども用いて再構築することでボカスギ林業景観の文化的な価値を明らかにすることを目的とした。

◎結果と考察

氷見地域では1900年頃から約80年間氷見地域ではノウとスギ人工林林業の複合的な生業がおこなわれ、間作によって育林にかかる労力を軽減する林業技術が実践されていた。

ボカスギ林業地における焼畑と間作の関係をみると、20世紀以降、ノウの作付け作物や間作期間に地域的な変異がみられた。作付け作物は終戦以降、救荒作物から嗜好性や換金性の高い作物へと変化した。また、地域によってノウと間作との間に密接な関係がある場合と、そうでない場合があることが明らかとなった。また、土地利用の分析から共有林的性格の強い山林や集落からの距離が遠い林地では間作が行われにくい傾向があった。このように地域や林地の条件によってボカスギ林業とノウ、間作の結びつき方には多様性がみられ、単一的な体系でボカスギ林業が括られるわけではないと考えられた。

氷見地域のボカスギ林業景観の特徴をみると、集落に近い山林にはボカスギが疎植され、集落から離れるほど植栽幅の狭いボカスギの一斉林がみられることが示唆された。特に、20世紀以降氷見地域中南部では間作を伴うボカスギ林業が循環的に行われ、植栽幅の広いボカスギ林業景観が維持されてきた。そのような歴史的経緯を有したボカスギ林は集落の背景となり、氷見地域固有の森林景観を形成していると言える。

間作地での社会的関係をみると、「家族・親戚(1～3世帯ほど)」「ナカマ(6～10世帯ほど)」「集落共同(数十～数百世帯)」「集落外の林業事業者等」の4種類の社会的集団の中でボカスギ林業が展開した。そして、20世紀に再生林が行われたボカスギ人工林に最も多い林業労働の関係性はナカマであった。土地所有者とナカマは近世以降の親分―子分の社会的関係性を基盤としており、経済的な格差はあったものの、ナカマの構成員らの自発的な労働提供が前提であった。この理由については労賃の有無や耕地条件(集落からの距離や耕地面積等)に応じてナカマの耕作期間が変化したことが挙げられた。このようにノウ及び間作へのナカマの関わり方は各戸の意思に委ねられたと推察する。間作地では土地所有者は下草刈りなどの初期保育の作業がナカマによる農作業で代替でき、育林作業の軽減につながった。そして、土地所有者は電柱用材の売上で現金収入を得ることができた。ナカマにとっても間作地で毎年の食料を確保することができ、土地所有者とナカマともに利益が相反しない関係性を形成していた。

◎ボカスギ林業景観の文化的価値

ボカスギ林業景観の文化的価値は以下の2点に集約される。

1点目は経済合理性の高い電柱用材産地を形成した点である。具体的には富山県西部地域では成長の早いボカスギが電柱材の適材として見出され、氷見地域においては挿し木苗造林によって短伐期で収穫できる安定した産地として確立した。このようにボカスギ林業景観は日本の近代化を支えた電信電気産業の発展を象徴する林業景観である。

2点目は、経済合理性を追求しつつも、近世以来醸成されてきた自然資源を持続的に利用するための社会的関係や社会的規範が景観に現れている点である。具体的には、19世紀以降氷見地域では在来のノウが林業の前作となりスギ人工林林業と間作による空間の重層の利用へと発展した。特に氷見地域中南部を中心に間作による農業生産と林地の初期保育労力軽減の共利関係が成立した。この共利関係には近世以来の社会関係を引き継いだメンバーシップ間の共助関係が貢献するケースもみられた。このような文化的背景と生産に関わる合理性にもとづいて、数十年にわたって集落背後の丘陵地にボカスギからなる林業景観を形成した。

以上のように間作を伴うボカスギ林業地の景観は、丘陵地帯での生業獲得における歴史的経緯と土地利用上の工夫を示す貴重な事例として、特筆すべき文化的価値があると言える。